

中期計画の項目	2-(4)-②	文化財情報基盤の整備・充実
年度計画の項目	2-(4)-①-1) 2-(4)-②-3)	① 文化財情報基盤の整備・充実 1) 国内外の文化財情報の文化財保護への活用、研究成果の効果的な発信及び研究の実施に資するデータベースを構築・運用する。特に、各種データベースを横断的に検索する総合検索を充実させる。また、調査研究の遂行に資する情報基盤としての所内情報システムを整備・充実させる。 ② 調査研究成果の発信 3) ウェブサイトの充実
プロジェクト名称	文化財情報基盤の整備・充実	
文化財情報資料部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○二神葉子（文化財情報研究室長）、小山田智寛（主任研究員）、石灰秀行（専門職）、武藤明子（アソシエイトフェロー）、安岡みのり（研究補佐員）、横尾千穂、高階郁美（以上、研究補佐員）	

【年度実績と成果】

4年度はこれまでに構築した文化財情報基盤を利用しつつ、文化財情報の文化財保護への活用という視点からの調査研究及びデータベースの構築、文化財情報の利用及び発信のための一層の環境整備を実施した。

○調査研究及び成果公開

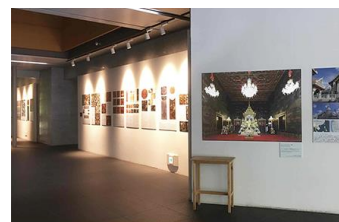
- 文化財情報及びデータベースとその活用に関連する調査研究を実施した。併せてプロジェクト「文化財情報の分析・活用と公開に関する調査研究」と連携、東京国立博物館所蔵黒田清輝油画作品のうち《湖畔》などに関するウェブコンテンツを制作した。
- パネル展示「タイ・バンコク所在王室第一級寺院 ワット・ラーチャブラディットの漆扉」を7月28日に開始し、解説パンフレット（日英）を制作・設置し、日本とタイをつなぐ文化財の理解向上に貢献した。

○情報蓄積・発信機能の強化

- ウェブサイトのデザインを変更した。また「総合検索」ウェブデータベースを中心に、データ追加、ガラス乾板データベースの画像の高精細化などを実施、文化財アーカイブズ研究室及び近・現代視覚芸術研究室と連携、データベース管理システムOracleによる所内データベースを適宜改良し利便性を向上した。さらに、ソーシャルメディアによる情報発信を適宜実施した。

○ネットワーク環境の整備・充実

- 各職員の端末を含むネットワーク機器及びソフトウェアの保守・監視を実施、セキュリティ確保に努めた。また、端末をActive Directoryに参加させ、個別認証機能を強化した。さらに、WiFiのゲスト利用者の認証システム及びDHCPの更新を行った。



エントランスロビー展示

年度計画評価	B
--------	---

【評定理由】

①適時性においては、アクセシビリティに配慮したウェブサイトのデザインを変更した点、情報発信の障壁解消のためのセミナーの開催が評価できる。②独創性においては、外注せず職員が独自に開発したデータベースである点、ウェブコンテンツは特別なアプリを用いずウェブ上でキャンパスの布目が見えるほどの作品画像の拡大表示、赤外と蛍光など異なる光源による写真を並べた表示といった機能を実現した点で独創性が高い。③発展性においては、《湖畔》ウェブコンテンツにおいて多様な光源により各作品の特徴を精密に記録した画像の公開で専門家の利用が促進され、作品研究の進展が期待できる。④効率性においては、データベース及びウェブコンテンツ構築を主に職員が行い業務を効率的に遂行できた。⑤継続性においては、情報発信、研修事業及びセキュリティ確保を継続的に実施した。

データベースのアクセス件数は異常アクセスを遮断した結果、目標値を下回ったが、ページビュー数は3年度比1.4倍増と、各利用者のデータベースへの滞在時間は増えており、国民に有効に活用されている。以上を勘案し、所期の計画を遂行できたと判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	A	A	B	B

【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
文化財に関するデータベースのアクセス件数：2,679,886件	①（実績値）データベースのアクセス件数 2,486,307件 ②（参考値）データベースのデータ件数 1,801,110件 ③（参考値）発表 3件（ア） ④（参考値）刊行物（パネル展示パンフレット） 1件（イ）	C

ア 小山田智寛「総合検索のリニューアルについて」文化財情報資料部研究会、東京文化財研究所、6月28日 ほか2件
イ『タイ・バンコク所在王室第一級寺院 ワット・ラーチャブラディットの漆扉』（東京文化財研究所、9月30日）

中期計画評価	B
--------	---

中期計画記載事項	文化財情報・資料の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としての文化財情報データベースを高度化する。また、文化財情報データベースの構築に関する国内外の事例調査を行い、調査研究及びその成果発信のための文化財情報基盤を計画的に整備する。なお、文化財に関するデータベースのアクセス件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由	安定運用のため短時間の反復的なアクセスを遮断したため、アクセス件数は目標値を下回っているが、ページビュー数は3年度比1.4倍増と、各利用者の滞在時間は増えているとみられる。 5年度以降も、文化財情報の文化財保護への活用のための研究及び研修を行い、所内他部局とも連携して研究の実施・成果発信のための文化財情報データベースを一層充実させ、情報システムの整備を実施する。

中期計画の項目	(4)-①-1)	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-①-1)	①文化財情報基盤の整備・充実 文化財関係の情報を収集して国内外に発信するため、その計画的収集、整理、保管、公開並びに電子化の推進による専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを構築・運用する。 1)国内外の文化財情報の文化財保護への活用、研究成果の効果的な発信及び研究の実施に資するデータベースを構築・運用する。特に、各種データベースを横断的に検索する総合検索を充実させる。また、調査研究の遂行に資する情報基盤としての所内情報システムを整備・充実させる。
プロジェクト名称	文化財に関するデータベースの充実	
企画調整部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○高妻洋成（文化財情報研究室長）、高田祐一（文化財情報研究室研究員）、Yanase, Peter（文化財情報研究室アソシエイトフェロー）、呉 修喆（文化財情報研究室アソシエイトフェロー）、厩 素妍（文化財情報研究室アソシエイトフェロー）	

【年度実績と成果】

- ・文化財情報データベースの充実として、従来より進めている報告書抄録、報告書の各データベースに関して、データの入力・更新した。公開データベースを更新した。
- ・全国の博物館等の文化財関係機関が作成している文化財 3D モデルと公開できる「全国 文化財情報デジタルツインプラットフォーム」を新たに公開した。産業技術総合研究所との共同研究成果である。文化財 3D モデルを 3D 地図上に表示できるため、地形や都市ビルデータ等を合わせて閲覧できる。開発と文化財保護の両立を図っていくプラットフォームとして重要である。
- ・文化財総覧 WebGIS がデジタルアーカイブ学会による第 4 回学会賞 学術賞（基盤・システム）を受賞した。
- ・追加した新機能は以下の通り

○全国遺跡報告総覧

OCR 済みの PDF に一括差し替え 237 件

重複書誌を整理し、報告書総目録掲載対象項目を表示した。

遺跡抄録の遺跡種別に「水中」を追加

Twitter ツイート時に管理機関名と Twitter アカウントを表示する機能を追加

NCID と JP 番号の一括登録（NCID：9,303 件・JP 番号：11,607 件）

書誌の巻次及びシリーズ番号にて一括置換

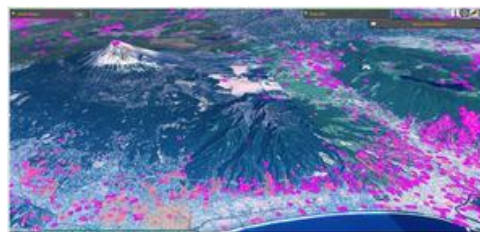
○文化財総覧 WebGIS

三重県四日市市の遺跡情報を登録

自然災害伝承碑の詳細表示と 3D 地形表示の機能公開

静岡県・岐阜県の CS 立体図追加

自然災害伝承碑のポップアップ表示



文化財位置情報と 3D 地形表示 富士山・愛鷹山周辺

文化財総覧 WebGIS

年度計画評価	A
--------	---

【評定理由】

①社会的には 3D の利活用が進んでいるところである。適時性においては、文化財 3D モデルのプラットフォームを構築し、国民から活発に利用されることで文化財情報のインフラとして機能している。②独創性においては、全国遺跡報告総覧のように他に類を見ないデータを提供しており、文化財専門用語辞書を活用し自然言語処理技術を活かした独自のデータ解析も提供している。③発展性においては、既存のデータベースの内容を着実に充実させるとともに、データベースの機能強化を実現している。全国の自治体や博物館など既に 1,357 機関が本事業に参加している。4 年度は新たに文化財 3D モデルプラットフォームを公開した。④全国の文化財担当者が Web システムに登録し、自動データ品質チェックを実施することで効率化を実現している。⑤継続性においては、データ登録について毎年文化庁から地方自治体へ周知されており、継続的な協力が見込まれる。大規模なデータベースを維持し、確実なデータ提供を多年に渡って実現している。公開データベースのアクセス件数は 3 年度比 105% となった。これらより、内容豊かなデータベースとして著しく発展していることから、定量評価の目標値は若干未達であるものの目標以上の成果をあげたと判断し、全体の評定を A とした。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	A	A	A	A

【目標値】

・文化財に関するデータベースのアクセス件数
11,612,614 件

【実績値・参考値】※括弧内は 3 年度件数

(実績値) 公開データベースの件数 35 件(32)
(参考値) 公開データベースへのアクセス件数 9,955,544 件(9,419,564 件)
公開データベースの一例：全国遺跡報告総覧
登録データ件数 421,300 件(284,928)
年間ダウンロード件数 2,348,202 件(1,971,911)
年間ページ閲覧数 117,834,000 件(99,974,779)
論文発表 25 件(ア) 口頭発表 11 件(イ) 刊行物 6 件(イ)

定量評価

C

ア論文 高田祐一他「Integrating the Japanese Archaeological Dataset into the ARIADNEplus Data Infrastructure」他計 25 件、イ研究発表 高田祐一「文化財情報プラットフォームとしての全国遺跡報告総覧ーデジタルアーカイブ・リファレンスツール・学術情報の流通ー」他 計 11 件、ウ刊行物 『デジタル技術による 文化財情報の記録と利活用 5』他計 6 件

中期計画評価	A
中期計画記載事項	文化財情報・資料の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としての文化財情報データベースを高度化する。また、文化財情報データベースの構築に関する国内外の事例調査を行い、調査研究及びその成果発信のための文化財情報基盤を計画的に整備する。なお、文化財に関するデータベースのアクセス件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由	4年度に公開した「全国文化財情報デジタルツインプラットフォーム」は、オンライン 3D 地図に文化財の 3D モデルを搭載できるシステムであり、世界的にも先進的な高度システムである。産業技術総合研究所との共同研究の成果で、先進技術にて文化財データの展開事例として重要である。また、文化財総覧 WebGIS がデジタルアーカイブ学会による第 4 回学会賞 学術賞（基盤・システム）を受賞するなど、データベースのアクセス件数は、目標値を下回ったものの、ページ閲覧数やダウンロード数は 3 年度比で 18%増加しており、認知度や利用頻度が高まっているため、A 評価とした。

中期計画の項目	(4)-①-2)	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-①-2)	①文化財情報基盤の整備・充実 文化財関係の情報を収集して国内外に発信するため、その計画的収集、整理、保管、公開並びに電子化の推進による専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを構築・運用する。 2)文化財情報のデジタルアーカイブに関する実践研究を行う。データの長期保管及び公開活用に関して、技術面・法律面含めたガイドラインを作成する。
プロジェクト名称	文化財情報のデジタルアーカイブに関する実践研究	
企画調整部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○高妻洋成（文化財情報研究室長）、高田祐一（文化財情報研究室研究員）、絹川桂（文化財情報係主任）	
【年度実績と成果】		
○データ長期保管 ・災害が多発する日本において、データの安定的な長期保管は課題である。特に津波等においては、サーバなどの機器が消失する場合があります。バックアップが重要である。また災害時でも可用性を高めるためには、ストレージのクラウド化が有効である。当研究所では、4年度にクラウドストレージを導入・展開した。長期保管を必要とされる研究データについて、容量無制限に保管できる環境を運用開始した。		
○公開活用に関する法律研究 ・研究報告第37冊『デジタル技術による文化財情報の記録と利活用5』を刊行した。「映像資料や文化財動画に現れる個人情報について」や「文化財デジタルアーカイブに関する権利処理の概観」など、デジタルアーカイブ、Tidyデータのありかた、知的財産権や権利処理などの論考を掲載している。法律専門家と作成しており、ガイドラインとして有用である。		

年度計画評価	A				
【評定理由】					
①適時性においては、災害が多発する昨今の状況に鑑みて至急必要な実践研究であり、ストレージ環境を実運用開始したことで災害対応を実現した。②独創性においては、研究報告の刊行は、全国的な課題に取り組む当研究所ならではの研究であり、文化財関係機関の業務に資する。③発展性においては、文化財データの長期保管や法律面の課題は、日本全国あるいは世界共通の課題である。IT技術の進化は加速しており、それにキャッチアップした研究報告の刊行は意義があり、今後も発展する。④効率性においては、容量無制限のストレージ環境であり、効率性に優れる。⑤継続性においては、高稼働率の継続性を実現したストレージ環境であり、業務継続性の確保を実現した。以上のように、当初計画以上の成果を上げていることからA評価とする。					
観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	A	A	A	A
【目標値】	【実績値・参考値】 (参考値) 報告書刊行数：1件（ア）				定量評価
					—
(ア) 奈良文化財研究所研究報告第37冊『デジタル技術による文化財情報の記録と利活用5』(2月)					

中期計画評価	A
中期計画記載事項	文化財情報・資料の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としての文化財情報データベースを高度化する。また、文化財情報データベースの構築に関する国内外の事例調査を行い、調査研究及びその成果発信のための文化財情報基盤を計画的に整備する。なお、文化財に関するデータベースのアクセス件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由	3年度には、データ長期保管、公開活用に関する法律研究それぞれが持つ課題を整理した。中期計画の2か年目となる4年度は、実際に運用段階に入った。特に公開活用に関する法律研究については、実践的な論考を研究報告にて刊行するなど、中期計画2か年目としては想定した以上の成果を上げることができており、5年度以降も継続して成果を上げることが期待できる。

中期計画の項目	2-(4)-①	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-①3)・4)	①文化財情報基盤の整備・充実 文化財関係の情報を収集して国内外に発信するため、その計画的収集、整理、保管、公開並びに電子化の推進による専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを構築・運用する。③調査研究及び文化財防災に役立つデータベースの充実並びにアーカイブ機能の更新及び拡張を行う。④文化財に関する図書、雑誌等の収集、整理、公開、提供を充実させる。
プロジェクト名称	専門的アーカイブと総合的レファレンスの拡充	
文化財情報資料部	○橋川英規（文化財アーカイブズ研究室長）、江村知子（文化財情報資料部長）、安永拓世（広領域研究室長）、米沢玲（研究員）、小山田智寛（主任研究員）、田村彩子、寺崎直子（以上、研究補佐員）ほか	

【年度実績と成果】

○全所的な文化財情報の発信

- ・副所長を委員長とするアーカイブWGを例年通り4回（5月16日、9月8日、12月8日、5年3月9日）開催し、アーカイブの拡充と積極的に情報発信を行うための協議をした。
- ・文化財画像などの効果的な利活用のために、著作権などに関する法律問題を広く扱う弁護士数藤雅彦氏を招き「データ利用についての実務を学ぶ勉強会」を開催した（7月10日）。
- ・当研究所所蔵資料を活用した文化財研究を支援するために、大学・大学院学生、美術館・博物館職員を対象とした「資料閲覧室利用ガイダンス」を立ち上げ、実施した（7月1日）。



資料閲覧室利用ガイダンスにおける説明の様子

○アーカイブを利用した研究・外部機関への協力

戦前の消失前の写真を「京都智積院の名宝」展（サントリー美術館）に提供し、報道にも協力したほか、「いにしえが好き！」展（国立歴史民俗博物館）にもガラス乾板画像を提供した。

○文化財研究のためのデータ蓄積と公開

- ・文化財防災への活用も見据えて、「東文研総合検索」等文化財アーカイブ機能を更新した。特に「展覧会における新型コロナウイルスの影響データベース」に新規に50件を追加し、3年公開分も適宜、更新した。
- ・当研究所75年史編纂資料の編成・記述に取り組み、概要と一部リストを資料閲覧室ウェブサイト公開した（5年3月31日）。またこれに関する取り組みを部内研究会にて報告し、関係者との情報共有を実施した（5年1月31日）。
- ・資料閲覧室の運営・管理 資料受け入れ数：感染症防止対策のため3年度に引き続き事前予約制での開室を継続、週3回（4月15日までは週2回）開室した。図書等の受け入れ 和漢書1,909件、洋書53件、展覧会図録・報告書等1,909件、雑誌2,903件（合計6,774件）・閲覧室利用状況：公開日総数129日・年間利用者合計877人

年度計画評価	A
--------	---

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、オープンアクセス資料をさらに増加したほか、「展覧会における新型コロナウイルスの影響データベース」を更新し、3年度を上回る計1,450件の展覧会情報を公開した。②独創性においては、古い写真資料を利用した研究を推進したほか、「専門的アーカイブの研究活用」を実践するため、新たな取り組みとして利用ガイダンスを立ち上げた。③発展性においては、はじめて弁護士等の専門家と連携して、著作権等の専門的な知見も取り入れたより効果的な情報発信を目指す取り組みを推進できた。④効率性においては、図書館システムを活用し、図書等の入力作業と情報発信を効率よく行った。⑤継続性においては、当研究所が有する情報・画像資料のデジタル化作業を継続し、質的な向上を達成できた。アーカイブWGとも連動して、専門的アーカイブの構築と活用を戦略的に推進した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	A	A	B	B

【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
	(参考値) ・学会・研究会等発表 2件(ア) ・論文 1件(イ) ・報告 1件(ウ)	—

ア 田村彩子「年史編纂資料の研究活用に向けた記述編成-東文研史資料を例に」文化財情報資料部研究会、東京文化財研究所、5年1月31日ほか1件

イ 江村知子「失われた寒山拾得像をもとめて-文化財アーカイブの奇跡」『寒山拾得図襖絵共同研究報告書』、5年3月

ウ 米沢玲「展覧会評 ブッダのお弟子さん 教えをつなぐ物語」『美術研究』438、5年3月

中期計画評価	B
--------	---

中期計画記載事項	文化財情報・資料の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としての文化財情報データベースを高度化する。また、文化財情報データベースの構築に関する国内外の事例調査を行い、調査研究及びその成果発信のための文化財情報基盤を計画的に整備する。なお、文化財に関するデータベースのアクセス件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由	オンラインを活用して公共性と専門性の双方を有する運営を進めることができた。中期計画の2年目として、文化財調査研究・成果の集約、データベースの継続的拡充はもとより、専門的アーカイブと総合的レファレンスの充実を推進するための新たな枠組み（資料閲覧室利用ガイダンス、データ利用勉強会）を立ち上げ、順調に計画を進められている。

中期計画の項目	2-(4)-①	文化財に関する情報・資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-①-4)	①文化財情報基盤の整備・充実 文化財関係の情報を収集して国内外に発信するため、その計画的収集、整理、保管、公開並びに電子化の推進による専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを構築・運用する。 4)文化財に関係する図書、雑誌等の収集、整理、公開、提供を充実させる。
プロジェクト名称	図書の収集・整理・公開・提供	
研究支援推進部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】○井関信雄（連携推進課長）、絹川佳（文化財情報係主任）、伊藤久美（事務補佐員）、山内章子（事務補佐員）、中西晶子（事務補佐員）、堀内千嘉（事務補佐員）、永岡美和（事務補佐員）、志賀明美（事務補佐員）、三上香織（事務補佐員）	
【年度実績と成果】		
【年度実績と成果】		
○資料の収集・整理・保管・提供		
収集・整理・保管については、例年どおり滞りなく実施した。提供については、引き続き新型コロナウイルス感染拡大防止対策を行いつつ、ウィズコロナに対応すべく、一般利用の人数制限を2人から4人に変更した。併せて利用時間の制限を緩和し、来館者の利便性向上に努めた。		
また寄贈図書の大量の受け入れを行い、その整理、公開、提供への対応を実施中である。		
購入図書	227冊	
寄贈図書	5,117冊	
雑誌	2,531冊	
一般利用者	254人	
利用冊数	1,831冊	
来館者複写件数	220件	
遠隔利用：複写受付件数	562件	
貸借受付件数	217件	

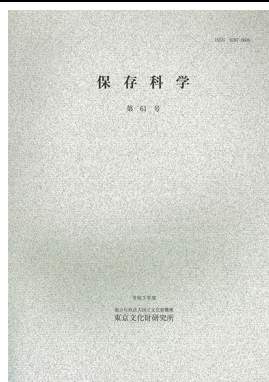
年度計画評価	B				
【評定理由】					
①適時性においては、新型コロナウイルス感染拡大防止対策の緩和に対応し、3年度よりも利用、閲覧可能な体制の維持に努めた。②発展性においては、引き続き Google カレンダーを利用して資料室の利用状況を公開しており、利便性の向上を図った。③効率性においては、2年度導入した資料室の予約フォームの更なる改善を実施し、より一層の効率性向上に取り組んだ。④継続性においては、新型コロナウイルス感染拡大防止対策の緩和などにより、3年度と比較して利用者へのサービス提供が向上しており、インターネットが利用できないなど予約なしで来室した利用者にも、空きがあれば対応をすることを行った。以上の観点から本事業は順調に推移していると判断した。					
観点	①適時性	②発展性	③効率性	④継続性	
定性評価	B	B	B	B	
【目標値】	【実績値・参考値】				定量評価
	(実績値)				
	・資料閲覧室・図書資料室の開室日数		240日		
	・資料閲覧室・図書資料室の利用者数		254人		
	・文化財に関する資料・図書等の総件数		509,763件		

中期計画評価	B
中期計画記載事項	文化財情報・資料の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としての文化財情報データベースを高度化する。また、文化財情報データベースの構築に関する国内外の事例調査を行い、調査研究及びその成果発信のための文化財情報基盤を計画的に整備する。なお、文化財に関するデータベースのアクセス件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由	3年度同様、中期計画に掲げた目標の一つである資料の収集において、調査・研究のための二次資料の収集が予算削減等の理由により困難をきたしているものの、各自自治体が発行する調査報告書は従来どおりに収集・整理・保管・提供を行うことができた。その他の目標については、本中期計画通りの安定した推移を見せている。また、4年度は他組織との共同研究等での新たな側面からデータベース発信ができ、中期計画の2年目として十分な成果を得たといえる。5年度以降も文化財に関する電子化でのアーカイブの拡充を継続的に行っていく。

中期計画の項目	2-(4)-②	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-②-1)	②調査研究成果の発信 文化財に関する調査研究成果について、定期的に刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多角的に発信する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトを実施させるとともに、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。 1) 定期刊行物の刊行 ・『東京文化財研究所年報』 ・『東京文化財研究所概要』 ・『東文研ニュース』 ・『美術研究』(年3冊) ・『日本美術年鑑』 ・『無形文化遺産研究報告』 ・『無形民俗文化財研究協議会報告書』 ・『保存科学』
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行	
文化財情報資料部	【プロジェクトスタッフ(責任者に○)】○齊藤孝正(所長)	

【年度実績と成果】

- ・『東京文化財研究所年報』2021年度版
- ・『東京文化財研究所概要』2022年度版
- ・『東文研ニュース』年2回(77,78号)
- ・『美術研究』(437号)(8月)
- ・『美術研究』(438号)(5年2月)
- ・『美術研究』(439号)(5年3月)
- ・『令和2年版 日本美術年鑑』(8月)
- ・『第15回 東京文化財研究所 無形文化遺産部 公開学術講座「樹木利用の文化—桜をつかう、桜を奏でる」報告書』(8月)
- ・『無形文化遺産部研究報告』16号(5年3月)
- ・『第16回無形民俗文化財研究協議会報告書』(5年3月)
- ・『フォーラムⅣ「伝統芸能と新型コロナウイルス—これからの普及・継承—」報告書』(5年3月)
- ・『保存科学』62号(5年3月)



『保存科学』



『令和2年度版日本美術年鑑』

年度計画評価	B
--------	---

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、『美術研究』で翻訳論文により海外での最新研究動向を紹介し、新型コロナウイルスの影響によって予定変更を余儀なくされた美術展覧会を展評という形で報じたほか、コロナ禍の伝統芸能における普及・継承をテーマとしたフォーラムの記録映像を、喫緊性を鑑みて期間限定配信したのち、報告書として刊行した。②独創性においては、『美術研究』437号の米沢玲・安永拓世の共著論文「光明寺所蔵羅漢図について—重層的な作品理解を目指して—」で光学的調査の成果や作品の来歴など多角的な研究が実践できたとともに、『保存科学』62号の紀芝蓮ほか著「光明寺所蔵《羅漢図》に使われた彩色材料」で文化財科学の分野でも連動的に論考が発表できたことが評価される。③発展性においては、『保存科学』、『無形文化遺産部研究報告』などが冊子体とあわせて機関リポジトリからウェブ公開されており、国内外から盛んに利活用されている点が評価できる。④効率性においては、『保存科学』が年内論文を受け付けているが投稿から査読を経て発刊までを約3か月の短期間で行い、一般的な学術雑誌と比べても迅速に成果公開がなされている点が評価できる。⑤継続性については、各種定期刊行物を継続的に編集・刊行するとともに、デジタルの利点も活かしながら成果公開を推進できた。よって、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	B	B	B	B

【目標値】

【実績値・参考値】

- ・日本美術年鑑 1点 ・美術研究 3点
- ・無形文化遺産部研究報告 1点 ・無形民俗文化財研究協議会報告 1点
- ・保存科学 1点

定量評価

—




中期計画評価	B
--------	---

中期計画記載事項	文化財に関する調査研究成果を定期刊行物やウェブサイト、公開講演会、現地説明会、シンポジウム等により、多角的に発信する。また、ウェブサイトにおいては、上記の発信手法と併用あるいはそれらを補完するとともに、ウェブの特徴を生かした情報発信を行い、国内外の利用者に向けた日本語はもとより多言語での情報発信を図る。
評定理由	当初の計画通り、各研究プロジェクトの研究成果を反映させた定期刊行物を刊行することができた。学術誌としての一定の水準を保ちながら、また当研究所の事業内容を一般に広報する上でも有益な内容の報告となるよう、継続的に刊行できたことが評価された。また各論文等を学術リポジトリでのウェブ公開を通じて、研究成果の発信を推進する。

中期計画の項目	2-(4)-②	文化財に関する情報・資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-②-1)2)3)	②調査研究成果の発信 1) 定期刊行物の刊行 ・『奈良文化財研究所紀要』・『奈良文化財研究所概要』・『奈文研ニュース』『埋蔵文化財ニュース』 2) 公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等 ・公開講演会 ・現地説明会 3) ウェブサイトの充実 ・なぶんけんブログ等（コラム作寶樓等）
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行、公開講演会・現地説明会等の開催、ウェブサイトの充実	
研究支援推進部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○井関雄（連携推進課長）、不藤忠義（研究支援課長）、田島章雅（連携推進課課長補佐）、永野陽子（研究支援課課長補佐）、桑原隆佳（連携推進課広報企画係長）、絹川佳（連携推進課文化財情報係主任）、新開良子（研究支援課係員）、ほか	
【年度実績と成果】 1) 定期刊行物の刊行 ・奈良文化財研究所概要 2022 12月刊行、2,000部 ・奈良文化財研究所紀要 2022 6月刊行、2,600部 ・奈文研ニュース「No. 85」6月、「No. 86」9月、「No. 87」12月、「No. 88」5年3月、各2,200部 2) 現地説明会等 ・8月6日藤原宮大極殿の発掘調査（飛鳥藤原第210次）現地見学会 於 橿原市醍醐町（参加者468人） ・10月15日興福寺東金堂院の回廊の発掘調査（平城第649次調査）現地見学会 於 奈良市登大路町（参加者1,120人） ・5年1月20日平城京左京三条一坊二坪の発掘調査（平城第650次調査）現地見学会 於 奈良市二条大路南（参加者数317人） ・5年3月20日西大寺旧境内弥勒金堂跡の発掘調査（平城第655次調査）現地見学会（参加者数139人） 3) 講演会 ・平城宮跡史跡指定100周年・奈良文化財研究所創立70周年記念シンポジウム 開催日：6月25日 於 なら100年会館大ホール テーマ「平城宮跡の過去・現在・未来」（来場者数：328名） ・第14回東京講演会 開催日：10月22日 於 有楽町朝日ホール テーマ「高松塚古墳壁画を伝える－発見から石室解体、修理を経て」（来場者数：178名） 4) シンポジウム ・12月16日～17日 第26回古代官衙・集落研究集会「古代集落の構造と変遷3」（古代集落を考える3）（参加者186人） ・5年2月4日～5日 第22回古代瓦研究会シンポジウム（参加者282人） 5) ウェブサイトの充実 ・「なぶんけんチャンネル」において、4年度は新たに9本の動画を公開し、チャンネルの開設から現在までに100本の動画を公開している。巡訪研究室、コラム作寶樓も引き続き公開した。（視聴数（オンライン）：58,142件）		

年度計画評価	B				
【評定理由】 ①適時性については、当研究所における調査研究成果を適時に刊行し、現地説明会や講演会開催の情報についてウェブサイト及びTwitter上に公開し情報発信を行った。②独創性については、新たな調査研究成果を発信することができた。③発展性については、3Dに関するデータベースの拡充や、他研究機関との共同研究としてのデータベースも増え、また、多様なブログ、コラム等を更新することによりウェブサイトの内容を充実させた。④継続性については、定期刊行物、講演会、ウェブサイト公開など従来から継続的に実施し、恒久的な提供が認められる。講演会等は、平城宮跡史跡指定100周年・奈良文化財研究所創立70周年を記念したシンポジウム「平城宮跡の過去・現在・未来」をなら100年会館大ホールにて開催したことにより、広く一般に研究成果の発信に取り組むことができた。					
観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	B	B	B	B	
【目標値】	【実績値・参考値】 (参考値)				定量評価
	・定期刊行物等の刊行件数6件 ・講演会等の開催回数7回 ・講演会等の来場者数 974人 ・学術情報リポジトリ等によるウェブサイトにおける論文等の公開件数 7,577件				—

中期計画評価	B	
中期計画記載事項	文化財に関する調査研究の成果を定期刊行物やウェブサイト、公開講演会、現地説明会、シンポジウム等により、多角的に発信する。また、ウェブサイトにおいては、上記の発信手法と併用あるいはそれらを補完するとともに、ウェブの特徴を生かした情報発信を行い、国内外の利用者に向けた日本語はもとより多言語での情報発信を図る。	
評定理由	定期刊行物及びウェブサイトにおいては調査研究の成果等を公表するものとして、計画通り順調に刊行や更新ができた。平城宮跡史跡指定100周年・奈良文化財研究所創立70周年記念シンポジウムについては、広く一般に研究成果の発信に取り組むため、なら100年会館大ホールにて開催し、より多くの方に対して発信することができた。以上を含めて、今中期計画期間の2年目として、3年目以降の今中期計画遂行における基盤となる事業を実施できたと判断し、Bと評価した。	

中期計画の項目	2-(4)-②	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-②-2)	②調査研究成果の発信 文化財に関する調査研究の成果について、定期的に刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多角的に発信する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトを実施させるとともに、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。 2)公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等 ・公開講座（オープンレクチャー）
プロジェクト名称	オープンレクチャー（調査・研究成果の公開）	
文化財情報資料部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○安永拓世（広領域研究室長）、吉田暁子（研究員）、黒崎夏央（アソシエイトフェロー）ほか	
【年度実績と成果】		
○11月8日（火）、一般から聴講者を募集し、オープンレクチャーを開催した。中期計画の2年目にあたり、大テーマは3年度と同じく「かたちを見る、かたちを読む」とした。また、新型コロナウイルスの感染防止を考慮し、3年度と同様に内部講師2名による1日の開催としたが、聴講者定員は30名から50名に増やし、抽選制とした。		
○当研究所・文化財情報資料部より2名の講演を行った。講演テーマは次の通りである。		
・江村知子（文化財情報資料部長）「遊楽図のまなざし—徳川美術館蔵・相応寺屏風を中心に」		
・吉田暁子（文化財情報資料部研究員）「岸田劉生の静物画—「見る」ことの主題化」		
○外部からの聴講者50名を得た。		
		
	講演風景（江村）	講演風景（吉田）
		
	広報のチラシ	

年度計画評価	B				
【評定理由】					
①適時性については、感染防止の観点から、定員を絞って抽選制とし、検温や消毒などの防止策を徹底した。結果、定員の2倍近くの応募があり、50人の参加に限定したが、時宜に合った講演テーマで実施できた。②独創性については、未発表の最新の研究成果を、新知見とともに公開することができたほか、高精細画像を活用した図様の解釈や、最新の光学調査に基づく研究成果の活用には、より高い独創性が発揮された。参加者からのアンケート結果では、「大変満足した」と「おおむね満足だった」を合わせて97%の回答を得ることができた。③発展性については、いずれの講演も今後の調査研究による深化や進展が望まれるもので、さらなる発展性が期待できる内容で実施できた。④効率性については、2名の専門の違う研究者による成果公開によって、一般市民に効率よく研究成果を発信できた。⑤継続性については、オープンレクチャーは、研究所において60年以上にわたり開催しているもので、研究の最先端を発信しつつ継続することができた。					
観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	A	B	B	B
【目標値】	【実績値・参考値】 (参考値) ・講演会の開催回数 1回				定量評価
					—

中期計画評価	B
中期計画記載事項	文化財に関する調査研究の成果を定期刊行物やウェブサイト、公開講演会、現地説明会、シンポジウム等により、多角的に発信する。また、ウェブサイトにおいては、上記の発信手法と併用あるいはそれらを補完するとともに、ウェブの特徴を生かした情報発信を行い、国内外の利用者に向けた日本語はもとより多言語での情報発信を図る。
評定理由	4年度は、今期中期計画の2年目にあたり、オープンレクチャーのテーマとしては「かたちを見る、かたちを読む」と今期中期計画に一貫したものだが、4年度の所員2名による発表は、高精細画像や光学調査や化学分析の成果によって、作品の「かたちを見る」ことを重視しつつも、それを美術史的な研究に還元し、「かたちを読む」という解釈によって、作品の真の姿に迫ろうとした点で、参加者からも好評を得た。また、3年度同様、コロナ対策も十分にいき、無事に終わることができた。

中期計画の項目	2-(4)-③	文化財に関する情報・資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-③-1)	③展示公開施設の充実 平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館の展示等を充実させ、来館者の理解を促進するとともに、平城宮跡史跡指定 100 周年、高松塚古墳壁画発見 50 周年、奈良文化財研究所創立 70 周年関連展示を行う。1)特別展・企画展
プロジェクト名称	平城宮跡資料館・飛鳥資料館・藤原宮跡資料室における展示公開	
企画調整部	【プロジェクトスタッフ(責任者に○)】○岩戸 晶子(企画調整部展示企画室長)、廣瀬智子(同アソシエイトフェロー)、下山千尋(同アソシエイトフェロー)、○石橋茂登(飛鳥資料館学芸室長)、清野陽一(同主任研究員)、竹内祥一朗(同研究員)、濱村美緒(同アソシエイトフェロー)ほか	
【年度実績と成果】 (1) 平城宮跡資料館 ・春期特別展「未来につなぐ平城宮跡」(4月29日～6月12日、40日間、7,893人) ・夏期企画展「大地鳴動」(7月16日～8月28日、38日間、4,106人) ・秋期特別展(1)「地下の正倉院展」(10月15日～11月13日、26日間、7,628人) ・秋期特別展(2)「のこった奇跡のこした軌跡」(於:平城宮跡いざない館企画展室 10月29日～12月11日、43日間、36,339人) ・展覧会や当研究所・平城宮跡を紹介する内容のインターネット生配信(ニコニコ美術館)を2回実施した。アンケートでは満足度99%を得た。(各回5時間、視聴者①32,208人、②26,492人) ・公式Twitterの開設や100周年を記念した平城宮跡公式キャラクターの発表を行うなど、積極的に広報に取り組んだ。 (2) 飛鳥資料館 ・ミニ展示「飛鳥資料館に寄贈された瓦」(4月22日～5月22日 28日間、3,268人) ・夏期企画展「第13回写真コンテスト「高松塚古墳」作品展」(7月15日～9月11日 51日間、2,912人)応募77点 ・秋期特別展「飛鳥美人 高松塚古墳の魅力」(10月21日～12月18日 51日間、7,280人) ・冬期企画展「飛鳥の考古学2021」(5年1月20日～3月12日 45日間、3,360人) (3) 藤原宮跡資料室 ・常設展示に加え、ロビーにて「藤原宮大極殿の調査(飛鳥藤原第208次)」、「石神遺跡SD1347A 出土の土器(石神遺跡第14・15次)」(11月1日～3月31日)を実施。		
		 記念特別展「のこった奇跡のこした軌跡」展展示風景
		 飛鳥資料館 秋期特別展

年度計画評価	B				
【評定理由】 ①適時性では、平城宮跡史跡指定 100 周年、当研究所創立 70 周年、高松塚古墳発見 50 周年に合わせた企画展示を平城宮跡資料館、平城宮いざない館、飛鳥資料館でそれぞれ開催した。②独創性では各館ともそれぞれの地域性を生かした展示を行うことができた。③発展性では、広報活動として行ったインターネット配信の視聴者数の伸びもよく、満足度99%超と好評を得ることができた。平城宮跡資料館の公式Twitterは開始8か月でフォロワー3,000人を獲得し、展示活動の普及・広報の新しい展開が期待できる。④継続性においては、各館の特別展・企画展は、ほぼ定期で継続的に実施しているが、毎回新たな内容で行っている。平城宮跡資料館の「地下の正倉院展」は平成19年から15回と継続的に開催してきた。飛鳥資料館の「写真コンテスト」は13回を数え、「飛鳥の考古学」は平成18年度以来継続して開催している。定量評価は、平城宮跡資料館では、特別展・企画展満足度アンケート80%、飛鳥資料館では、89.3%であった。以上から、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。					
観点	①適時性	②独創性	③発展性	⑤継続性	
定性評価	A	B	A	B	
【目標値】 (1)平城宮跡資料館 特別展・企画展満足度アンケート 85% (2)飛鳥資料館 特別展・企画展満足度アンケート 85%	【実績値・参考値】 (実績値)(1)平城宮跡資料館企画展満足度アンケート 80% (2)飛鳥資料館特別展・企画展満足度アンケート 89.3% (参考値)(1)平城宮跡資料館入館者数 39,515人、平城宮いざない館特別展入館者数 (10/29～12/11 43日間 36,339人)、開催日数310日、刊行物等発行実績 3件(ア～ウ)、特別展・企画展など4回 (2)飛鳥資料館 入館者数24,719人、開館日数307日、刊行物等発行実績 2件(エ、オ)、特別展・企画展など4回 (3)藤原宮跡資料室 入館者数7,133人、開館日数357日				定量評価 B
ア) 春期特別展「未来につなぐ平城宮跡ー保存運動のあけぼのー」図録(A4版フルカラー、47頁、4月29日発行) イ) 秋期特別展「地下の正倉院展ー平城木簡年代記〔クロニクル〕ー」(A4版フルカラー、32頁、10月15日発行) ウ) 秋期特別展「のこった奇跡のこした軌跡ー未来につなぐ平城宮跡ー」(A4版フルカラー、112頁、10月29日発行) エ) 飛鳥資料館図録第75冊『飛鳥美人 高松塚古墳の魅力』(B5変形判フルカラー56ページ 10月21日発行) オ) 飛鳥資料館カタログ第39冊『飛鳥の考古学2022』(A4判フルカラー22ページ 1月20日発行)					

中期計画評価	B
中期計画記載事項	平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館については、研究成果の公開施設としての役割を強化する観点からウェブサイトによる動画配信を含め、展示等を充実させ、来館者の理解を促進する。なお、来館者に対する満足度アンケートにおける上位評価が前中期目標の期間と同程度の水準の維持を目指す。
評定理由	4年度は平城宮跡史跡指定100周年、当研究所創立70周年、高松塚古墳発見50周年という節目の年であり、各館ともそれを記念した特別展を開催することができた。また、平城地区においては2回のインターネットの生配信を実施したほか、各館ともSNSの活用を進めるなど、広報面での新たな取り組みを強化している。満足度においては、平城宮跡資料館において若干目標値を下回ったが、明治期の平城宮跡の保護・顕彰活動や災害考古学など従来なじみが少ない分野の展示にチャレンジしたことなどが要因と考えられる。以上のことから、事業自体は順調に推移していると判断し、B評価とした。

中期計画の項目	2-(4)-③	文化財に関する情報・資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-③-2)	③展示公開施設の充実 平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館の展示等を充実させ、来館者の理解を促進するとともに、平城宮跡史跡指定 100 周年、高松塚古墳壁画発見 50 周年、奈良文化財研究所創立 70 周年関連展示を行う。 2) 定期的に勉強会や研修を開催し、平城宮跡解説ボランティアを育成するとともに、解説ボランティアとの連絡会議等を通じて、より効果的かつ効率的な制度運用を行う。
プロジェクト名称	平城宮跡解説ボランティアの研修内容の充実及び運用改善	
研究支援推進部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】○井関信雄（連携推進課長）、田島章雅（連携推進課課長補佐）、桑原隆佳（連携推進課広報企画係長）、岩井靖子（連携推進課事務補佐員）	

【年度実績と成果】

1) 解説ボランティアに関する会議

- ・平城宮跡解説ボランティア懇談会の開催（研究部と事務部が一体となったボランティア活動を検討する会議、毎月 1 回、計 11 回開催）
- ・平城宮跡解説ボランティア連絡会議の開催（解説ボランティア班長と当研究所職員によるボランティア活動の確認、活性化、改善等を検討するための会議、毎月 1 回、計 11 回開催）
- ・平城宮跡歴史公園ガイド連絡協議会（NPO 法人平城宮跡サポートネットワーク、奈良県（平城京 再生プロジェクト）、国交省（平城宮跡管理センター）、当研究所の 4 者で行う国営飛鳥歴史公園内のボランティア活動等の情報共有、意見交換を行う会議：2 か月に 1 回、計 6 回開催）

2) 平城宮跡解説ボランティア活動再開

- ・新型コロナウイルス感染拡大防止のため平城宮跡解説ボランティア活動を中止していたが、平城宮跡解説ボランティア懇談会において自治体の方針・要請を踏まえた活動再開の目安を具体的に定めた再開目安の各条件を満たしたことにより、4 月 12 日から平城宮跡解説ボランティア事業を再開した。

年度計画評価	B
--------	---

【評定理由】

4 年度は、4 月 12 日から平城宮跡解説ボランティア事業を再開したことに伴い、平城宮跡解説ボランティアの方々のモチベーションを保つことに留意した。①適時性については、解説ボランティアへの当研究所からの最新の情報提供、解説ボランティアからの改善等の意見を随時取り入れるための研究部と事務部が一体となって組織した「平城宮跡解説ボランティア懇談会」を定期的に開催した。②独創性については、3 年度の当研究所の研究成果を記載している「奈良文化財研究所紀要 2022」を全ボランティアに送付し、解説ボランティアの資質向上を図った。③発展性については、ボランティア懇談会において解説ボランティアからの意見を随時取り入れるようにすることにより、活動の活性化や運用改善が進められた。④継続性については、ボランティア連絡会議を定期的に開催し、また、毎朝朝礼を行いボランティアとの意思疎通を引続き行ったことにより、所期の目標を達成したと考える。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	B	B	B	B	

【目標値】	【実績値・参考値】 (実績値) (参考値) ・解説ボランティア登録人数：121 人 ・ボランティア解説を受けた来場者延べ人数：46,535 人 ・解説活動日数：282 日	定量評価
		-

中期計画評価	B
--------	---

中期計画記載事項	平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館については、研究成果の公開施設としての役割を強化する観点からウェブサイトによる動画配信を含め、展示等を充実させ、来館者の理解を促進する。なお、来館者に対する満足度アンケートにおける上位評価が前中期目標の期間と同程度の水準の維持を目指す。また、宮跡等への来訪者に文化財及び文化財研究所の研究成果等に関する理解を深めてもらうため、「新しい生活様式」を踏まえつつ、解説ボランティアを育成し、その活動を支援する。
評定理由	4 年度はボランティア活動が再開したことにより、ボランティア連絡会議を対面で開催し、継続的にボランティアの育成と意思疎通を図るなど、中期計画の 2 年度目として、必要な対応を講じることができた。以上を含めて、事業を順調に進められていると判断し、B 評価とした。